わたしたちのお母さんは精霊なんだよ

六導

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時崎狂三はある闘いで傷を負い逃走する際に空間の裂け目に吸い込まれ別の世界へと迷い込む。

そこは自分がいた世界とは別の世界であることを知った狂三は何とか元の世界に戻るために万能の願望機である聖杯に自身を元の世界に帰ることを望もうと考えて聖杯戦争に参加する。

そこで狂三はあるサーヴァントに出会うのであった。

目次

第一話 …… 1
第二話 …… 6
第三話 …… 10
第四話 …… 14
第五話 …… 18

第一話

人気のない深夜の森の中で息を切らせ周囲をしきりに確認している少女が一人いた。
その少女は黒髪で左右非対称のツインテールに赤と黒を基調としたドレスを着た、とてもこの鬱蒼とした森の中にいるような人物とは思えない可憐な少女だった。
しかし、彼女はただの人間ではない。
彼女の名は時崎狂三、ＡＳＴという組織からは最悪の精霊と呼ばれる存在だ。

「はぁ、はぁ、何とか逃げ切りましたわね」
私は五河琴里さんの天使の圧倒的な火力によって手酷い反撃を受けてそのまま逃走するという無様な結果を晒してしまっていた。
「逃げ切ったはいいのですが、これからどうしましょうか」
まず、考えるべきは失った『時間』の補充でしょう。
私はあの戦闘で多数の分身達を失い、天使である刻々帝【ザフキエル】に大きなダメージを負ってしまった。
ならば、それの補充と修復をしなくてはならないが今の私は戦える戦力が少ない。この状態でまたＡＳＴや真那さんレベルの敵に狙われれば正直に申しましてかなり不味いですわね。
「となると気付かれない程度に少しづつ補充していくしかありませんわね。・・・はぁ、士道さんに会うのは大分先になりそうですわね」
あの邪魔さえなければ、彼を手に入れて私の目的に大きく近づけたかもしれないのに、そう思ってしまうがそれはしかたないと自分に言い聞かせて私は取り敢えず手頃な町に向かおうとした時、突然目の前の空間に亀裂が走った。
その一瞬の出来事に私が驚愕している間に抵抗する間も無くその空間の亀裂に吸い込まれてしまった。

「・・・うっ、ここはどこですの？」
私が目を覚ますとそこは先ほどの森とは違い、どこかの町の裏路地にあるゴミ捨て場の上に放り捨てられたように私は寝転がっていた。
周囲を見渡しても誰もいない。
自分の体に異常はない。
あの空間の亀裂に吸い込まれてどこか別の場所に移動したということでしょうか、私は足に力を入れて立ち上がり影に溶け込み、自身のこの状況とこのあたり一帯を調べることにした。
この時の私はもっと大きな異変に気付いていなかった。

あの路地裏で目を覚ましてから一週間が時が経過した。
「私がいた世界とは別の世界でなのでしょうか・・・ここは」
私は日が少し傾きかけた頃の街を一人ぶらりと歩きながらこの1週間のことを振り返る、時喰みの城で少しずつ時間を補充しながらこの辺りを調べたが、調べれば調べるほどにここが自分が元いた世界ではないという事実が明らかになった。
まず、時代が私のいた時代よりも過去にいること。
これは周りの人間や新聞などで確認したから間違い無いでしょう。
もっとも大きな理由が私がいた世界で起きたあの大災害が起きていないということ。
過去に戻っているが時代的にはもうあのユーラシア大空災が起きているはずなのにそのことを全く知ることができなかった。
そうした私がいた世界のと違いが多数存在することを確認した私はここが元いた世界ではないと考え始めていた。
そしてここが別の世界の場合、私は何があっても元の世界に帰らなくてはいけない。
だって・・・そうでないと。
「君、ちょっといいかな？」
そうした私の思考を打ち切るようにその男は私に話しかけてきた。

見た感じは温かな笑みを浮かべた少しチャラい男
しかし、私には分かる。
この男は人を殺したことがある。
そう確信できる雰囲気を私は今、この男の笑みから感じ取っていた。
「あら、なんでしょうか？」
しかし私はあえてこの男に笑顔で応じた。
「いや、あんまりにも君が綺麗だったからさ、ちょっとお茶でもって思ってさ」
「あらあら、それはステキですわね。是非お願いしますわ」
そうして私は新たな情報を得るために男の誘いに乗ることにした。

「呆気ないですわね」
古びたマンションの一室で私は足元で気絶させた先ほどの男を見下ろしながらため息をついた。

数分前
私は男の誘いに乗り男の部屋にやってきた。
すると周りの音が聞こえなくなったことに不審に思っていると男は懐から取り出したナイフで切りつけようとしてきたが私はそれを難なくかわしてから男の頭を軽めに殴って気絶させた。
「しかし、魔術ですか」
私は気絶した男、名前は相良豹馬というらしい。
この男は魔術師で”とある儀式の生贄”の為に私に声を掛けたということを私は豹馬を刻々帝の能力である十の弾【ユッド】で調べて知ることができた。
そして男はまぁ概ね小物といった感じですが私のいた世界にはない概念である魔術の知識と
「聖杯戦争ですか」

何でも過去の英雄をサーヴァントとして召喚し最後の一騎になるまで争い、そしてその勝者にはあらゆる願望を叶える権利が与えられるらしい。
もしその話を誰かに聞かされたら完全に冗談でしょうと笑う所ですが
私は部屋にある道具や血で描かれた魔法陣をもう一度見つめてながら
「この部屋に貼ってあるお札の音消しの結界とやらは本物の様ですし。なら、その話が本当なのだとしたら私を元の世界に帰ることも可能という事でしょうか」
しかし、そこで問題となるのが
「マスターの資格である令呪ですわね。私はそれを持っていませんし、どうしましょうか。私は何ともしても元の世界に帰らなければいけないのですけれど」
でなければ、今までの自分の行い全てが無駄になってしまう。
なら、試しにと私は男が持っていた古びた本を手に取り、そこに書かれていた呪文をものは試しにと問えてみることにした。
「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。手向ける色は〝黒〟　降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」
私は古びて、所々滲んでいたり虫喰い状態の本に書いてる詠唱を最後まで行う。
この現状を打破できる力が欲しい。
何より私の目的の為に
「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつ五度。ただ、満たされる刻を破却する」
「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」
「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝　三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

すると床に血で描かれた魔法陣が輝いた。

第二話

光が収まるとそこには肌の露出が多い衣装を纏った、短め銀髪にアイスブルーの瞳の幼い少女が一人立っていた。
「え、まさか、召喚に成功したんですの？ほんとうに？」
正直に申しますとまさか、一度目で召喚できるとは思っても見なかったのすが
「うん、本当だよ。おかあさん（マスター）」
その声はとても幼くそしておかあさんとマスターを同時に発声したような奇妙な声だった。
「本当に私がマスターでいいんですの？というかお母さん!?」
「そうだよ！わたしたちのおかあさん（マスター）だからおかあさん（マスター）だよ！」
そういって私に駆け寄ってくる子を私は拒むことは出来ずに自然に抱きしめてしまい、それによってその子はより一層嬉しそうに顔を私のお腹の辺りにすりすりと擦りつけて甘えてくる。
その仕草に私も母性を刺激されてしまうがひとまず確認することが幾つかあるので私はその子を話かける。
「まぁ、そのお母さんについては後でもう一度ゆっくり話すとして、まずは貴女のお名前を教えていただいても宜しいですか？私の名前は時崎狂三といいますわ」
召喚された子の目線に合わせるように私はしゃがみ込んでからもう一度顔をよく見る。小さな傷がある以外は本当にただの子供のようだ、しかしその内には私やこれまで出会った精霊とはまた別の力のようなモノを感じる。
確かにこの子は人間ではなくサーヴァントと呼ばれる者なのだろう。
だから私はあの召喚によってどんなサーヴァントを召喚したのかを知るためにまずは名前を尋ねてみることにした。
「うん、そうだね。わたしたちのアサシンのサーヴァントで真名はジャック・ザ・リッパーだよ。おかあさん（マスター）」

その名前は知っている。
確か１８８８年に少なくとも５人の女性を殺したとされる連続殺人鬼、そして何よりも有名なのは人種や性別するらも謎に包まれ未だに犯人が誰か分かっていないという点だろう。それがこんなにも幼い少女だとは驚きであるがそれを顔には出さず笑顔で私は話しかける。
「分かりましたわ。取り敢えず私は貴女の事をアサシンと呼ぶべきでしょうか?それともジャックと呼んだ方が宜しいんでしょうか?」
「う～ん、わたしたちは別にアサシンでもジャックでもいいよ。おかあさん」
「あら、そうですの。なら私はこれから貴女の事をジャックと呼びますわね」
「うん、それでいいよ。おかあさん　それとあの人から令呪を取っておかあさんにあげるね」
そう言ってジャックは気絶したフリをしている豹馬を指差した。
先ほどの召喚した時に目を覚まして気を伺っていたようだが豹馬は自身の置かれている状況の不味さに気付いたようで急いで逃げるために立ち上がろうとしたがそれは叶わずに倒れ込んだ。
なぜなら彼が力を入れるべき片足はもうなかったからだ。
正確には右膝から下が綺麗に切断されていた。
「もう、動かないで。大人しくおかあさんにソレを渡してね」
痛みで喋ることすら困難な豹馬に血のついたナイフを持ったジャックがいっそ愛らしさすら感じる声でお願いするが
「れ、れいじゅをも・・・」
それでも最後の抵抗を試みようたした豹馬だがそれは目の前の存在には余りに遅すぎるのであった。
ジャックはナイフを使って下顎と令呪のある右手を切断し、右手は床に落ちる前にキャッチし、下顎はそのまま床にぐちゃっと音を出して落ちた。
声にならない呼吸音が部屋中に響き渡り、辺りを転げ回り真っ赤な血で部屋を汚し、大きな物音を立てようとも彼が自ら張った音消しの

結界によってこの部屋の異常を外の者が感知することはない。
　そうした悲惨な光景を生み出したジャックは頬に血をつけて、笑顔で私に元に駆け寄ると
「ねぇねぇ、おかあさん今からわたしたちがおかあさんの手にコレを写してもいいかな？」
「そうですわね。このままだと私はジャックの正式なマスターになれないのでお願いしてもよろしいですか？」
　私と話していた時は普通の子供のようだったが一度敵と認識した相手には容赦のない残虐性を見せるジャックに少し思うところがないわけでもないがそれを自分が言うのかと少し違う思ってしまい私は口には出さずにジャックの要求通りに手を差し出して令呪の転写を頼んだ。

　結果だけ言うと令呪の写す作業は比較的すぐに済んだ。私の右手には赤い三角で構成された刺青があり、その周りはミミズが這ったような縫い目、その少し悪い見た目の処置に物申したいがジャックのもうやりきりましたといった顔にそれを言うことすらできずに私はこれから自分の治療をジャックにさせないようにすることを胸に誓うのでした。
「これで私は正式なマスターになれましたわね。ジャック」
「うん！おかあさんから凄く魔力が送られてくるのを感じるよ！」
「ええ、確かに私とジャックが繋がっているような感覚、これが魔力のパスというモノなんでしょうね。それでは彼にはもう要はないので」
　と言って私の影であまり動かなくなった豹馬を食べる。
　するといつもの食べるとは違う感覚を得た。
　そう例えるなら一人の人間から多くの時間を得たような・・・
　そこで私は気が付いた。
　確か、魔術師は魔術刻印というモノを代々受け継いでいるのでしたね。
　ならその掛けた分の時間を普通の人間よりも多く私は補充できたという訳ですわね。

これは素晴らしい発見ですわ。
と私が喜んでいるとジャックが少し頬を膨らませて私に抗議する。
「もう！おかあさん！全部とっちゃうなんてひどいよ！」
とプンスカといった感じで怒っていた。
「あらあら、それは申し訳ないですがこれも私の時間を補充するためなので許して下さいな」
「む～ん。じゃあ、その代わりにもう一回ぎゅうって、してほしいなぁ」
本当に可愛い子ですわね。
私はジャックの言う通りにぎゅうっと抱きしめる。
そうして１０分ほど抱きしめた辺りでようやく機嫌が直ったジャックが私に対しての疑問を口にした。
「ねぇねぇ、そういえば。おかあさんって人間じゃないよね？」
小さな子がおかあさんに質問するように聞いてくるジャックに私はこの子のマスターになったのだから説明する必要があるだろうと思い私はジャックの質問に答えることにした。
「ええ、そうですわ。私は精霊ですの、でも物語に出てくるような精霊とはまた違うと思いますわ」
「ふ～ん。そうなんだ。じゃあこれからどうするの？おかあさん」
「そうですわね・・・まずは、旅行の準備をしませんといけませんわね」
と言って私とジャックはこれから行われる聖杯戦争の準備の為に血だらけの真っ赤な部屋を後にするのだった。

この後、私の時間を補充するためにいくつかの非合法の店の人間を襲うのだがその際に私はジャックからおかあさんは大食いだねという不名誉な称号をもらうのだった。

第三話

街灯だけが僅かに足元を照らすそんな夜の街を二人の少女が歩いていた。

一人は高級そうな黒のブラウスと黒のロングスカートに身を包み、片目を隠した黒髪の少女。

もう一人はそんな少女よりも幼く短い銀髪の少女、こちらは黒髪の少女とは対照的に白いワンピースを着ている。

二人は離れないように手を繋いで歩いている。そんな後姿だけを見れば仲のいい二人組のようにも見えなくはないが、二人の雰囲気は和気藹々としたものではなかった。

そんな空気に耐えられなくなった黒髪の少女が口を開いた。

「あの、ジャックもしかしてですけど。私に対して何か怒っていますの？」

「・・・」

私が話しかけてもジャックは無言のまま、しかし繋いだ手は離さない。

私とジャックは今日朝一の便でルーマニアの空港に到着した。そこからまず方々に分身達に情報収集をさせ、私はジャックと一緒に町を観光して回り甘いモノの食べ歩きをしていた。そこまでは良かったのだが、その後、私とジャックに絡んできたチンピラ達より私が時間を補充した辺りから、ジャックの機嫌がすこぶる悪い。

最初はてっきり食べ歩きを邪魔されたことを怒っているのかと思い別の甘いモノを買ってみたがそれでもジャックの機嫌は良くならなかった。

「・・・だって、いつもおかあさんばっかり喰べててズルいんだもん」

ジャックが口を尖らせながらそう自身の心中を私に話してくれた。

「でもジャックには私から十分な魔力を送っていますわよ」

そう。私はジャックと契約してから結構な霊力、いやここでいう魔力をジャックに送っている。

ちなみにジャックが私のことをおかあさんと呼ぶのをやめさせる

ことはできませんでした。
だって、「やめて」とジャックに言っても「わたしたちのこと嫌いなの？」ってウルウルした目で言われるのですわ？そんなの拒否できるわけありませんわよ。
「・・・」
「ああ、もうそんな目で見ないで下さいまし。ええ、ええ、分かりましたわよ。〝後ろ〟にいる獲物はジャックに譲りますので今回はそれで許して下さいな」
私がそう言うと、先ほどまでウルウルした目で見上げていたジャックの表情がパァっと笑顔に変わった。
「やった～♪　おかあさん、ありがとう」
そう今、私とジャックの後ろには二人ほど後をつけている気配があった。
おそらくは私の食事現場の不穏な気配を察知し、私達二人の様子を探ろうとしてると言った感じでしょうね。
「でも、ジャック。一応情報は欲しいのですぐに喰べないで下さいね」
「うん！分かったよ。おかさあん」
さて、次の獲物はいい情報を持っているといいのですけどと私は思いつつ、これから始めるイタズラにワクワクする少女たちのような笑顔をする私とジャックであった。

日付が変わってしまうギリギリの時間で宿に戻った私は不思議な夢を見た。
始めに感じたのは身を切るような寒さと辺りを包む濃い霧だった。
その霧を吸い込むと酷く肺が焼けるような痛みを感じた。
そうした痛みを感じて自分の胸を抑えるように手を出した時にふと手を見るとやけに自分の腕が小さく細い事に気が付いて、自分の体を見てさらに驚いた。
どうやら私はジャックになっていると分かり、そこでこれが夢だと

理解した。
そしてジャックはフラフラと街を歩き回っては女性に話しかけた。
「おかあさん、おかあさん」と、しかしどの女性に話しかけても返ってくる言葉はジャックを拒絶する言葉ばかり。中には手を出す者までいる始末だった。
しかし、拒絶されればされるほどにジャックのある感情が強くなっていった。
それは母の元へ帰りたいという感情。それが極限まで強くなった事で彼女たちをある凶行に駆り立てたのだろう。
次に場面が切り替わると、ジャックがナイフで女性の喉元を切り裂くところだった。
「ごめんね、おかあさん。ごめんね、ごめんね、ごめんね。でもかえりたいの」
とても悲しげな声でジャックはその女性を解体した。
そしてジャックは女性だったパーツを持って血の匂いがするそれを頬に寄せて涙を流していた。
かえりたい。だってここはとてもさむいの、でもここはとてもあたたかいから。
そんなジャックの悲しい声は誰の耳にも届かない。
私はその絶望したジャックを抱きしめることもできず、ただジャックの中から見つめることしかできなかった。私は歴史に名を刻んだジャック・ザ・リッパーの罪を、ほんの一部だけ知ることができた。
恐怖という名の信仰を得た反英霊。ジャック・ザ・リッパーという名を持つ少女に私は

夢から醒める。
自分がベッドで寝ているのを確認すると少しホッとした。
私の行ったこともない街を自分の脳内だけで再現出来るとは考えにくい。ならアレは、ジャックと契約したとこに関わっていると見て

いいのでしょうね。
「おかあさん、大丈夫？　汗びっしょりだよ？嫌な夢でも見たの？」
とても心配そうに私を見つめてくるジャックに私は笑顔を作り、ジャックを包み込むように抱きしめてもう一度ベットに寝転ぶ。
「ええ、とってもこわ～い夢を見てしまいましたの。だから・・・少しこうさせて下さいな。ジャック」
始めは驚いていたジャックだが、すぐに笑みを浮かべてジャックも私に手を伸ばしてきた。
「うん、いいよ。わたしたちもおかあさんとこうしていたいから」
そして私はジャックを抱きながらまた少し眠りについた。
もう朝まで時間はないが今だけはこうしていたいし、こうしてあげることしか今の私には出来そうにないのですから。

第四話

ギシギシっと音がする。
縄と縄が擦れる音でその縄は縛られた男の血によって赤く染まっていた。
「ねぇ、赤のマスターとそのサーヴァントについてもっと他に知っている事はありませんの？」
「し、知らない！ほ、本当だ！サーヴァントについては本当に一部の者しか知らないんだ！でも知っているマスターについては全部話した通りだ」
男は椅子に縛られて片目を抉られてもう片方の目は閉じないように固定され、体には幾つもアザや刺し傷があり、体中に痛みがない箇所の方が少ないのではという状態でも男は少女の質問に必死に答えていた。
しかし、少女はニヤリと笑み浮かべて顔を男に近づける。
「でも、嘘を言っているかも知れませんわ」
「そ、そんな！」
少女の答えに男は顔を青くするがその時、向こうから二つの足音がこちらに近づいてきた。
「ご苦労様でした。私」
「あら、意外に早かったですわね。私」
「ええ、ですがここからは私とジャックが引き継ぎますわ」
「あら、分かりましたわ」
男は目の前にいる少女と全く瓜二つの少女とそれに連れられた来た銀髪の幼い少女を見て絶望したがそんな男に気が付いた今来た方の少女がこちらに話しかけてきた。
「ああ、そんな顔をしないで下さいな。もう貴方の役目は終わりましたから」
少女は男に何かの紙の束を見せる。そこには魔術協会側が用意したマスターについての情報が書かれていた。
「はい、見ての通り。貴方とは別の方が親切なことにこんな資料を

持っていてくれたお陰で私たちにとっての貴方の役目はもう終わりになりましたから」
　と笑顔で話す少女の言葉に男は淡い希望を持つが続く次の言葉で男は真の絶望を知ることになった。
「ではジャック、このコインが表か裏を当てた方がこの方をいただくと言うことでよろしいですわね」
「うん、いいよ。おかあさん」
「では「ま、待ってくれ！話が違う！終わったら解放してくれるんじゃないのか！」まぁ、何か勘違いなされているようですが」
　少女は話しながら高く高くコインを上に飛ばし銀髪の幼い少女がウラっと大きな声で言い、少女が
「では、私は表」
　そう言ってコインを受け止めてコインを男に見せる。
　コインは表だった。
「私はこう言ったはずですわよ。喋ってくれたら助かるのですけれどと・・・ああでも、この助かるは私が助かる訳で別に貴方が助かる訳ではないので。そこの所を貴方は都合よく考えていらしたようですわね。まぁ、私達もこれから忙しくなるのでそろそろ終わりにしましょうか」
　そう言って男は叫ぶ暇もなく影から出てきた腕に掴まれて少女の影へと引き摺り込まれた。

「ふん、まぁまぁ時間を確保できましたわね。」
「おかあさん、やっぱりどっちがたべるかはジャンケンで決めない」
「でも、コイントスの方がより公平になると思いませんか。ジャック」
　と二人で先程のことについて話していると影からまた別の私の分身の一人が出できた。
「お話中に申し訳ありませんが魔術師が向かっていますわよ、私。それにおそらくサーヴァントを連れていますわ、見ただけで存在が他の人間とは全くの別物ですものでしたから」

しかし、そんな話を聞いた私はとくに慌てもせずに
「予定通りですわね。魔術協会のバックアップ要員の人を消すことでサーヴァントとマスターを誘い出すことは出来ましたわね。で、誰が向かっていますの？特徴は？」
そうして私からこちらにやって来る魔術師の特徴を聞きながら私は手に入れた資料から相手を特定した。
「獅子劫界離・・・死霊魔術師ですか・・・これまで相手にしたことのない魔術師ですわね。ということですがジャックいけますか？」
と私がジャックに話しかけると退屈そうにしていた顔からすぐに満面の笑みを浮かべて
「うん、わたしたちならできるよ！」
そう自信満々に答える姿に頼もしさを覚えつつも一応、注意はしておく
「そうでしたわね。ならジャック予定通りお願いします、でも今回は相手もサーヴァントを従えているはずですわ。最初で決められないならすぐに撤退してくださいね」
「もう、おかあさんはしんぱいしすぎだよ。じゃあ、行ってくるね」
そう言ってジャックは行ってきますといった感じで手を振りながら霊体化して部屋を後にする。
「まぁ、これは決闘ではなく戦争ですから漁夫の利を狙う者が必ずいるはずですわ」
「ならば私達は漁夫の利を狙う者を狙うということですわね。私」
「ええ、その通りですわ。私」
そう言うと私は影に潜った。

そして誰もいなくなった部屋の机には血の付いた道具と行方不明者またしてという見出しの新聞が置いてあった。

ｓｉｄｅフィオレ

「まったく何を考えているの？　ダーニックおじさまの許可も得ずに！」
　私が獅子劫との戦いに割って入ってきたカウレスに責めるように言うとカウレスは少し視線を晒してから口を開いた。
「わ、悪い。姉さんでもアーチャーは俺たちにとって重要だろ？だから姉さんの手助けをって・・・思って」
「だからって貴方、サーヴァントも連れずにこんな所まで来たの！それがどんな・・・もう、いいわ。確かにあの時は助かりました」
　カウレスの言葉に一気に怒るが事実として助けられたのでここで怒るのは自分の方が子供のような気がしたので説教をやめて私は用意された車に礼装を下ろしてからホムンクルス達に車椅子に乗せてもらっていた時、突然私の車椅子を押そうとしていたホムンクルスが倒れた。
「姉ちゃん!!」
　カウレスの声を聞いて私が動くよりも先に先ほどまでとは別の少女の声がした。
「動かないで下さいね。魔術師さん」
　その言葉と共に私のこめかみに冷たくて硬いモノが突きつけられた。
　それが先ほどの戦闘で嫌というほど見た銃器の類であることはすぐに察することができた。
「あ、貴女は何者で、すか」
「あら、質問はこちらが致しますので、残念ながら私がその質問に答える義理はありませんわね。それとそこの弟さんはじっとしていて下さいな」
　私は少しだけ視線をカウレスの方に向けると無数の腕が影から伸びてカウレスとホムンクルス達を押さえつけていた。
　戦闘用に調整されたホムンクルスもいるのにまるでビクともしないのを見るにかなりの力で抑えられているということだろう。
「さて、では最初の質問ですが貴女が知っている黒のサーヴァントの真名を教えていただけますか」

第五話

「・・・」
「あら、だんまりですの？」
　私の問いかけにもできる限り無反応に徹しようとしているのが分かりますがまだあまいですわね。
　ほんの少し体が震えていますわね、おそらくこういった命のやり取りの経験がまだまだ少ないのでしょうね
「では、もう一度だけ聞きますわよ。貴女が知っている黒のサーヴァントの真名を教えていただけますか？」
「・・・」
「そうですか。なら残ね「令呪を持って命ずる！バーサーカー今すぐここに来い！」」
　私は引き金を指をかけかけたその時、私の影で押さえていた少年の方からの言葉に私はそちらを振り向くとそこには巨大なメイスを持った純白のドレスを着た少女がいた。
　その少女が軽く振るったメイスで少年の拘束していた腕を弾き飛ばされた。
　拘束がなくなったことで少年は立ち上がり敵である私を睨んできた。
「あらあら、これは派手な登場ですわね」
　自身のサーヴァントを呼んだにも関わらず尚も余裕な態度を崩さない私に怪訝な顔をする少年に私は丁寧に語り掛けるように言う
「確かにサーヴァントを呼んだことで貴方は私の拘束を逃れられましたが依然私には、こうして人質である貴方のお姉さんがいることをお忘れでは？それに見たところ暴れるしか能のないバーサーカーに人質であるお姉さんを傷つけずにこの私から取り戻すことができますの？」
　そう言うと少年は顔を歪める。
　その表情から私の言ったことが全て正しいという証明に他ならないということが分からないのでしょうか、だから私の優位は揺るがな

いはずだった。
もう一人のサーヴァントの介入させなければ
「そうとも限りませんよ」
その声は私の背後から掛かった
私は反射的に後ろを見るとそこには皮鎧を着た青年が私に向けて廻し蹴りをする所だった。
直後、私は後方へ吹っ飛んだ。
掴んでいた人質は廻し蹴りをガードするために咄嗟に手を放した一瞬の隙にかすめ取られてしまった。
「マスター、手荒な手段を取ってしまい申し訳ありません」
「ケッホ、ケホ、い、いいえ。こちらこそ助かりました。アーチャー」
こうも容易く私の霊装の守りを超えて私にダメージを与えますか、流石はサーヴァントというところですわね。
私は口から血を吐き出しながらも今しがた私に蹴りを入れた相手をよく見る。
アーチャーと呼ばれた青年は左肩を負傷しているようですね。なら・・・と私がそう相手を分析しているとバチバチという音がしたので上を見るとバーサーカーがメイスを上段に構えて私に向けて振り下ろすところだったので私は地面を転がるようにして攻撃を回避して立ち上がりながら手にした短銃でバーサーカーに攻撃する。弾丸は吸い込まれるように命中するが相手は狂戦士たるバーサーカーこの程度の攻撃では怯みもせずにまっすぐ向かってくるので後ろに下がり距離を取りながらこの場をどう切り抜けるかを考える。
そしてすぐに答えは出た。・・・撤退するべきでしょうね。
勝ち筋は確かにあるにはあるがこんな序盤で天使を使った挙句それで撃ち漏らせば最悪、私の能力を相手に知られることになる。
それは避けなくてはいけない。まだ私の天使の能力を知られる訳にはいきませんから。
「流石にこうも場が荒れますと折角のムードが台無しですので今日の所はこれで失礼しますわね」
「ウウアアア!!」

「いい加減、鬱陶しいですわね！」
そう言って私はバーサーカーではなく彼女のマスターである少年に向けて銃弾を放つ。
「!!」
バーサーカーは急いでマスターを庇うように回り込むがしかし間に合わないだろうと思われたが
「私がいることをお忘れなく、たとえ負傷していもマスターともう一人程度なら抱えてから回避する程度は問題ありません」
またしてもアーチャーによって私の企みは潰えた。
しかし、私はその隙をついて影に潜ってその場を後にした。

ｓｉｄｅカウレス

「バーサーカー、一応城に戻るまでは実体化しておいてくれ」
襲撃された直後というのもあり俺は一応警戒するようにバーサーカーに伝えておく、その考えは姉さんも同じようで同じようにアーチャーに指示を出す。
「アーチャーもお願いします」
「分かりました。マスター」
「ウウ」
二人の了解を得たことで俺は姉さんの車イスを起こしてから姉さんを乗せて別の迎えの車が来るまで先ほどの襲撃者について話し合うことにした。
「姉さん、さっきのは」
「ええ、おそらくあれが赤のアサシンでしょう。急に現れた事からも気配遮断で私達の隙を伺っていたのでしょう。それにあの影から出ていた腕はなにかしらの宝具かスキルなのかもしれません」
確かにアサシンのサーヴァントなら気配遮断で俺たちの隙をつくなんて朝飯前だろう。
「ああ、そういえばバーサーカー、さっきのケガは大丈夫か？」

そういって俺はバーサーカーを見ると右肩に一発と左脇腹に掠った跡があった。
そのうち右肩に関しては貫通している所を見るとあのサーヴァントの銃の威力は通常のそれとは全く違うのだと思わされた。
「ウウ」
俺が心配して声をかけるとバーサーカーは首を横に振った。
おそらく大丈夫だといいたいのだろう。
「で、カウレスはあのアサシンの真名に心当たりはあるかしら？私は残念ながらないわ。あの影からの腕と銃それに・・・」
「あの時計みたいな右目だよな・・・あれだけ特徴的なのに真名が予想できないんだよなぁ。アーチャーは何か分かった事はないのか？」
「そうですね。銃を使っていたことから比較的に近代に近い英霊だとは思いますが私もあのアサシンの真名については分かりません。しかしアサシンはあの戦闘において終始余裕があるように感じられました、私とバーサーカーの二騎に勝てると言う自信からの余裕と言うよりは自分は絶対に死なないと確信しているような感じと言うのでしょうか」
それを聞くと益々疑問が湧くあの戦闘は最初こそ姉ちゃんを人質に取ってあのアサシンが優位ではあったがアーチャーの参戦で戦闘能力の低いアサシンクラスにとっては状況はかなり悪くなったはずなのにアーチャーでもあり数々の英雄を教え導いた彼の観察眼を持つ彼がこう言うってことはまず間違いないはずだ。
そう考えていると迎えの車が来たので俺と姉ちゃんは警戒しながら何とか無事に城に帰ることができた。